

# 高校生への心理教育に関するパイロット研究

## —スクールカウンセラーのクラス訪問と自尊感情評価の変化—

堀恭子<sup>1</sup>・いとうたけひこ<sup>2</sup>・  
(<sup>1</sup> 聖学院大学・<sup>2</sup> 和光大学)

スクールカウンセリングには、治療的側面（カウンセリング等）、組織的側面（コミュニティ援助）、教育的側面（心理教育的関与）の3側面があり、スクールカウンセラーには、これら3側面を適切に結び付け相互促進的な関わりが求められるとも言われている。近年、深刻ないじめの問題などを鑑み当事者へのカウンセリングだけでなく、組織への介入や、いじめ再発を未然に防ぐ心理教育（予防）の必要性が言われるようになっており、本研究では、スクールカウンセラーの心理教育についてその内容や効果の検討を行うためのパイロット研究を報告する。

**【目的】** 首都圏の公立高校生に原田（2014）が行ったソーシャルスキルトレーニングを参考に、先行研究の対象生徒と比較して本研究の対象生徒の特徴を知り、ソーシャルスキルトレーニングの前後においてソーシャルスキル自己評定や共感的感情に変化を測定し、先行研究との比較検討を行う。

**【方法】** 2014年5月首都圏の高校に通う1年生に、スクールカウンセラーのクラス訪問を実施し、クラス訪問前後で相川・藤田（2004）のソーシャルスキル自己評定尺度・櫻井ら（2011）の共感的感情反応尺度の結果に違いは現れるのかどうかを調査した。分析対象となったのはクラス訪問前7クラス276名（男子131名、女子145名）であった。クラス訪問1か月後7クラス264名（男子124名、女子140名）であった。

**【結果】** ソーシャルスキル自己評定尺度35項目のうち、7,24,25,27は反転項目であるので修正し、算出した合計値の平均をクラス訪問前とクラス訪問3週間後比較しt値（両側検定, df543）を算出した。さらに先行研究と比較検討した。その結果、関係開始8項目  $M: 2.62 \rightarrow 2.64$ , t値 0.29（先行研究  $2.59 \rightarrow 2.54$ , t値 2.05）、解説8項目  $M: 2.77 \rightarrow 2.83$ , t値 0.86（先行研究  $2.69 \rightarrow 2.76$ , t値 2.83）、主張性7項目:  $M: 2.57 \rightarrow 2.62$ , t値 0.69（先行研究  $2.53 \rightarrow 2.6$ , t値 2.45）、感情統制4項目  $M: 2.39 \rightarrow 2.34$ , t値 0.48（先行研究  $2.45 \rightarrow 2.37$ , t値 2.88）、関係維持4項目  $M: 2.91 \rightarrow 2.91$ , t値 2.18（先行研究  $2.81 \rightarrow 2.83$ , t値 0.83）、記号化4項目  $M: 2.83 \rightarrow 2.86$ , t値 0.17（先行研究  $2.70 \rightarrow 2.71$ , t値 0.26）であった。また共感的感情反応尺度20項目のうち、10が反転項目であるので修正し、算出した合計値の平均を同様にクラス訪問前後との比較、先行研究との比較を行った。その結果、ポジティブな感情への好感・共有  $M: 3.96 \rightarrow 3.89$ , t値 0.41（先行研究  $3.66 \rightarrow 3.68$ , t値 0.69）、ネガティブな感情の共有  $M: 3.23 \rightarrow 3.24$ , t値 1.21（先行研究  $3.16 \rightarrow 3.11$ , t値 0.92）、ネガティブな感情への同情  $M: 3.69 \rightarrow 3.70$ , t値 1.80（先行研究  $3.53 \rightarrow 3.47$ , t値 1.59）であった。

**【考察】** 本研究の対象生徒を先行研究の対象生徒と比べると、全体的に先行研究の対象生徒より自分のソーシャルスキルを高めに評価しているが、感情統制の項目のみ先行研究より評価値が低く、また共感的反応はどの項目も先行研究より高かった。これらの結果より、本研究の対象生徒の平均像は人間関係に自信はあるが、感情統制はあまり取れていないと感じているものの、相手に対する共感という点ではバランスのとれた存在であるといえる。また、スクールカウンセラーのクラス訪問前後の変化については、ソーシャルスキル自己評定の関係維持の項目以外は変化が見られなかった。事前テストはスクールカウンセラーのクラス訪問直前に行うことができたが、事後テストは学校行事の都合等で直後に実施できず3週間後になってしまったため、時間経過の影響や体育祭という生徒にとって大きな意味を持つ学校行事の影響など、心理教育の効果のみの検討が困難になってしまったと考えられる。関係維持についてのみ、t値が高かったのは、クラス訪問後の体育祭に向けて団結する方法を強調した内容に、有用という感想が多く書き込まれ、生徒にとって強く認識されたためと予測された。

**【引用文献】** 原田恵理子（2014）. 学校全体を対象としたソーシャルスキルトレーニングの効果の検討 東京情報大学研究論集 17-2, 1-11